

コバケンの追悼コンサート

盛田 常夫

東日本大震災からまだ 1 年も経っていない。被災者の方々の無念と厳しさを慰めようもなく、遠く離れた地からの支援にも絶対的な限界はあるが、二つの追悼コンサートでハンガリーの友人たちとミサを執り行った。わずかながらの義援金も集まった。5 月のマーチャーシュ教会でモーツアルト「レクイエム」、11 月は芸術宮殿 (MUPA) でヴェルディ「レクイエム」と、二つの大きな鎮魂曲を奏でることができた。多くの心あるハンガリーの友人・知人や音楽家が、演奏者としてあるいは聴衆として参加してくれた。集められた義援金額は大きくないが、震災に心を痛めているハンガリーの人々と一緒に、鎮魂の夕べをもてたことが何物にも代えがたい。

この二つのコンサートの企画に協力してくれたハンガリーの音楽家は、皆、「炎の指揮者コバケン」こと、小林研一郎が 40 年近い年月にわたってハンガリーで育ててくれたコバケンファンである。とくに国立合唱団 (国立フィルハーモニー合唱団) は 5 月のコンサートの音頭をとってくれ、11 月には相思相愛のコバケンと共演してくれた (本誌 11 号には、5 月のコンサートでオケ編成のために奔走した桑名一恵さんのエッセイが掲載されている)。

コバケンと国立合唱団との付き合いは長い。私が初めて合唱団のお手伝いをしたのは 1996 年の日本公演。滞在費が 100 万円ほど足りないと緊急連絡を受け、野村證券専務の斉藤惇氏 (現、東京証券取引所社長) にお願ひして即座の支援をいただいた。この前年、コバケン率いる武蔵野合唱団が国立フィルハーモニー国立合唱団とマーラー「千人の交響曲」を企画したが、屋内スポーツ会館を借りる資金が足りないと相談された。急いでこのコンサートを野村投資銀行ハンガリー (株) 創立 5 周年記念行事に仕立て、本社から 300 万円を出してもらった。1994 年秋に現在の国立フィル支配人のコヴァーチ・ゲーザが MAV オーケストラから移籍・着任したばかりで、このコンサートがゲーザと私の最初の大仕事になった。こういう経緯から、いつの間にか、コバケンと国立フィルや合唱団との間を仲立ちする役回りを演じてきた。

コバケンが一番持ち味を発揮できるのが、合唱曲付き交響曲である。ソリスト、合唱団、オーケストラを束ねるのはたいへん難しい。オーケストラ指揮に定評のある指揮者は多いが、歌も同時に指揮できる指揮者は意外に少ない。歌心がないと、ソリストや合唱団を指導できないからだ。

世界の指揮者の多くは楽器のソリストとして大成した人たちだ。これらの指揮者の音楽観や音感は並みのものではない。現在のハンガリー国立フィルの音楽監督であるコチッシュ・ゾルターンは、言うまでもなくピアニストとして一流の音楽家である。音楽観や楽譜を読み込む力は超一流である。したがって、こういうソリストが音楽監督になると、日ご

ろの練習は非常に厳しくなる。間違っただす者はすぐに名指しされる。こういう訓練を重ねれば、確かにオーケストラの技量が上がる。そして、これはオーケストラにとって貴重な価値である。他方、コチシュのコンサート本番の指揮振りは、褒められたものではない。コチシュにしてみれば、日ごろの練習やリハーサルで厳しく注意したことが守られていけば、それで問題ないのだろう。しかし、彼の指揮振りを見る限り、その「完成品」の価値を理解するのが難しい。それは合唱曲を振る場合も同じである。ピアノは超一流でも、歌がうまいとは限らない。歌心をもつのはもっと難しい。それが指揮振りにも現れる。

コバケンによく「ソリストとして高みに達した人々を、僕のような才能のない音楽家が指揮（指示）するのは申し訳ない」という意味のことを話す。一つ一つの楽器や声楽の道で大成した音楽家には、それぞれ孤高の凄みがある。その高みは持って生まれた才能にも支えられている。とくにヨーロッパの音楽家は世界のトップ水準にある。そういうクラシック音楽の世界で、しかも中欧という音楽のメッカで、音楽家としての認知を受けるのは並大抵のことではない。しかも、世界の外れからきた日本人がこの地で名声を得るのは奇跡に近い。

指揮者はサッカーチームの監督にもたとえることができる。いかに日本のサッカー水準が上がったとはいえ、ヨーロッパは世界のプレーヤーが集まる本場。最近では若い日本選手がヨーロッパで活躍しているが、日本人監督がプレミアムリーグやブンデスリガあるいはセリエ A の監督になることなど想像もできない。ヨーロッパのオーケストラの音楽監督や常任指揮者になるというのは、まさにこういう世界最高峰のサッカーリーグの監督になるほどの価値があることなのだ。しかも、国立フィルハーモニーというのは代表監督のようなものだから、リーグ監督のもう一つ上のレベルになる。

サッカーもほかのスポーツと同じように、必ずしも名選手が名監督になっているわけではない。いわば名選手は高みを極めたソリスト。ソリストとしての成功は必ずしも監督としての成功を保証しない。現レアル・マドリードの監督であるモリーニョは名監督の誉れが高いが、選手としての経歴はほとんどゼロである。しかし、現場を歩きながら、通訳やアシスタントコーチを務めるうちに、自分の理論や方法を身につけた。Jリーグの監督を見ても、選手として頂上を極めた人はほとんどいない。監督長嶋に失望した人々も、ある意味で納得している。「名選手、名監督ならず」とは長嶋の形容のためにあるような枕詞だが、それはすべての分野で言えることなのだ。会社で断トツの成績を上げた社員が、優れた社長になれるわけではない。

コバケンが合唱に強い理由はいくつかある。まず歌うことが好きなことだ。しかも、声が良い。歌謡曲からオペラまでレパートリーは広い。美空ひばり「悲しい酒」（ドイツ語台詞付き）に始まり、イタリアオペラまで歌う。この遊び心がないと、歌の指導はできない。楽器のプロは大概、歌は苦手だ。コチシュが歌ったのを聴いたことはないが、多分、

彼の歌唱は聴くに堪えないだろうと思う。

もう一つは、下積み時代のアルバイトである。指揮者として売れない時期に、コバケンには多くの合唱団を指揮する仕事をこなしてきた。武蔵野合唱団や早稲田グリークラブなど、多くの合唱指揮の経験がある。それぞれのパートのバランスやニュアンスを調整して、発声から立ち振舞にいたるまで事細かに合唱をまとめ上げることができるオーケストラ指揮者は稀だ。だが、コバケンには下積み時代の経験が大きな宝になっている。コンサート後の演奏者を称えるショウタイムも、下積み時代を経験した者でなければ思いつかない。

コバケンの2年振りのハンガリー公演はジュール・フィルハーモニー音楽監督ベルケシュ・カールマン（武蔵野音楽大学客員教授兼任）の執念によるもの。ベルケシュがジュールオケの音楽監督に就任した2年前から、数限りないほどの電話を受けた。「何時コバケンがハンガリーに来るか」、「必ずジュールで振ってくれ」、と。彼の押しの強さには定評がある。知る人ぞ知るで、本人も7度の結婚を果たしたことを悪びれもせず話すが、これほどのマメさと押しの強さがなければ、とても7回も結婚式を挙げる気にはならないだろうと感心する。とにかく、押しに押された私は「コバケンがハンガリーに来たら、必ずジュールへ行くから」と、同じ答えを繰り返すしかなかった。

2011年1月末に小林夫人から「秋にハンガリーへ2週間行けます」という連絡があった。急いでベルケシュに連絡し、ジュールオケの日程を決めてから、他のオケの予定を打診した。ジュールではベートーヴェンの交響曲とストラヴィンスキー「火の鳥」、ブダペストではMAVオーケストラがヴェルディ「レクイエム」をやるということでプログラムがまとまった。ところが、ここからさらに二転三転することになった。

MAVオケに契約書を催促したところ、突然に「ヴェルディはやれない」という。予定されている10月末から11月1日はハンガリーの祝日で、ヴェルディ「レクイエム」のような大きなコンサートをやれば、経費がかかってもたない。祝祭日のリハーサルには通常の倍の給与を払う必要がある。それをコバケンに伝えると、「なんとしても国立合唱団と一緒に、ヴェルディをやりたいので、実現して欲しい」という返事。ベルケシュにヴェルディをやらないかと持ちかけたが、やはりお金がかかるから難しいという。そこで、コンチェルトブダペストの支配人に打診した。ちょっと時間はかかったが、定期公演プログラムに入れたいという。ベルケシュに「ヴェルディはコンチェルトブダペストやる」と伝えたところ、急に自分のオケでヴェルディをやりたいと言いだした。これには参った。かくように、芸術家相手の交渉は簡単ではない。

こういうやり取りをしている間に、大震災が起きた。ヴェルディをどこがやるかが決まっていなかった段階で、ベルケシュは早々と11月1日の芸術宮殿会場を抑えてしまい、他のオケが使えないようにしてしまった。なんとも手回しが良い。こうなれば、選択肢は一つしかない。コンチェルトブダペストには「申し訳ないが、ジュールからは2年越しのラブコ

ールがあり、ジュールオケを優先しない訳にいかない」と事情を話して降りてもらい、ヴェルディ「レクイエム」をジュールオケに回し、当初ジュールオケが予定していたプログラムを MAV オケがやることで関係者の了解をとった。ヴェルディ「レクイエム」はジュールで 10 月 29 日、ブダペストで 11 月 1 日と決め、このブダペスト公演を震災追悼コンサートにすることも決めた。追悼コンサートの出演者の報酬はなし、節約したお金は義援金に回すことにした。11 月 1 日はハンガリーのお盆の日だから、この日に「レクイエム」で追悼ミサ曲が演奏されるのは願ってもないことだ。

こういう経緯はあったが、ジュールオケは全力を挙げて、ヴェルディ「レクイエム」を実現してくれた。ベルケシュは当代ハンガリーを代表する最高のソリストを編成すると約束し、当方からは国立合唱団を使うことをお願いした。MUPA 公演では舞台の上に大スクリーンを出し、曲の進行に合わせて、数枚の宗教画（「最後の審判」をテーマにしたミケランジェロとジョットのフレスコ画、ボッシュの油絵）がプロジェクターで映しだされた。さらに曲の始まりと終りに照明を落とし、最後にはローソク電球の灯をともすという工夫まで用意された。ジュールオケの舞台芸術監督の企画である。こういうアイディアはやはりヨーロッパでないと思いつかない。しかも、「怒りの日」が始まる曲の展開では、赤い照明に切り替えるという念の入れようだった。

しかし、短時間のゲネプロでは最初と最後のシーンの照明を確認しただけで、それ以上のテストはできなかった。だから、宗教画のプロジェクションも照明も本番一発で行われた。コバケンからは「通してやっていないものを本番でやって大丈夫か。止めた方が良いのでは」と念を押されたが、彼らもプロだから信頼して任せましょうと了解してもらった。

ジュールのリハーサルで合唱団とソリスト全員が完全に揃ったのは、本番前のゲネプロの時だけ。前日のリハーサルではバスの歌手が欠席、前前日の最初のリハーサルにはソリスト全員が参集したが、国立合唱団は地方公演で参加できなかった。しかし、そこは合唱曲に強いマエストロである。このような変則的なリハーサル 2 回で、この難しい曲をまとめ上げた。これにはベルケシュも驚嘆していた。

ベルケシュはジュール公演の後に、武蔵野音大オケの指揮のために東京へ戻ったが、MUPA の公演終了と同時に、まだ日本の夜が明けやらぬ時間に電話をくれ、何度も感謝の気持ちを伝えてくれた。「長年の夢が実現した。これは君と僕が協力したからできたのだ」と。12 月の「コバケンと仲間たち」の東北公演で、MUPA の義援金がベルケシュからコバケンへ手渡しされる。

(もりた・つねお)